

増上寺、台徳院殿の御廟のうち、に榮ゆるものは、諸國採藥記、國史、艸木昆蟲考、後にうつしうへさせ給ひしにて、もあるべきにや、一説に檜椿は寄生にして、すべて南方暖和の地に生ず、薩摩讃岐及び伊豆などにもまゝ、これありといへり、今按にひのき椿の伊勢國及び増上寺等にあるものは、予○屋代弘賢代いまだ其樹を親見せず、今忍岡の稻荷俗にこれを穴のの境内にあるものは、即白玉椿にして、その樹極めて高大なりといへ共、その寄生は多く枝梢にありて、本幹大枝には生せず、其形は朴樹チ、キ或は桑樹上の寄生とは異にして、扁柏ヒ、キに似て扁柏にあらず、海柏ウ、ヒ、キに似て海柏にもあらず、別には是一種の寄生よりなると申傳ふるよし、予寛保中夏台命によりて彼地に行、此椿の木御用に付、一丈計の木二本を奉りしを、吹上御庭に植させられしなり、此椿のありし村は、東海道石薬師の驛より一里程江戸方ウに來れば其村みゆるなり、

〔本朝奇跡談上〕同國勢伊鈴鹿郡高宮村に檜椿ヒのうらまきと云名木あり、椿の木より檜の葉出る也、總而此村の椿に、檜の葉交り出る也、弘法大師檜を椿となし給ふと云傳るよし、所の者申傳る也、彼椿有し村は東海道石薬師の驛より壹里程、江戸の方へ來れば高宮村見ゆる、此所に在、

〔璫囊抄十一〕弘法大師ノ御出家受學等ノ様如何略○中

檜尾ニ御座シ時略○中 檜葉ヒヲ以テ御手ヲ摩淨便宜ニアリケル、椿ノ上ニ授繫テ誓テ曰ク、我が宿願可果遂、此葉彼木ニ生付ベシト被仰ケルガ、檜葉則椿ノ上ニ生付テ、今ニアリト云々、是ヲ世ニ柴手水シ、テ、ウ、ツト云也、

山茶花

〔書言字考節用集六〕生植山茶花サ、チ、ア、ノ、ハ、ナ一名海紅、詳三

〔大和本草十二〕花茶梅 山茶ノ類ニテ葉モ花モ小ナリ、白アリ、香ヨシ、山ニモアリ、實ニ油アリ、山ニ

多キヲ村民取テ利トス、九月ヨリ花ヒラク、家園ニ植ルニハ淡紅アリ、深紅アリ、紅ヲ、バ海紅トモ云、共ニ本草ニ不載、海紅ハ十月ヨリ二月マデ花アリ、中華ノ書ニ載タリ、冬花稀ナル時開キテ盛